実存現象学的研究――心理学の代案としての「人間科学」

スコット・D・チャーチル＊1，エイミー・M・フィッシャー＝スミス＊2
（監訳：田中彰吾＊3，訳：村井尚子＊4・植田嘉好子＊5・奥井遼＊6）

＊1 Scott D. Churchill. Professor, University of Dallas
＊2 Amy M. Fisher-Smith. Associate professor/Clinical psychologist, University of Dallas
＊3 東海大学教授，＊4 京都女子大学教授，＊5 川崎医療福祉大学准教授，＊6 同志社大学准教授

〔翻訳〕

【凡例】

・本稿は以下の論文の日本語訳である．
Scott D. Churchill and Amy Fisher-Smith. (2022). Existential phenomenological research: A “human science” alternative for psychology. In B. D. Slife, S. C. Yanchar, & F. C. Richardson (Eds.), *Routledge international handbook of theoretical and philosophical psychology: Critiques, problems, and alternatives to psychological ideas* (pp. 473-494). New York, NY: Routledge.
・訳出は二段階に分け，まず，序文を田中が，1節を村井が，2節前半を植田が，2節後半を奥井がそれぞれ訳出し，後に全体の修正および訳注の補足を田中が行なった．
・訳語や文献について補足が必要と思われる箇所には〔……〕として監訳者が補足を加えた．また，ドイツ語，フランス語原典からの引用で日本語訳がある場合は，なるべくそれらを利用したが，訳文を統一する必要から文章を一部改変している．
・イタリックで強調された箇所は，訳文では下線を付して表示した（ただしインタビュー・データからの引用文，書籍の題名を除く）．
・訳文としての読みやすさを考慮し，原著にはない節番号を付した．

私たちは否応なく人間行動に惹きつけられる．心理学をとても魅力的なものにしている一つの理由はこの点にある――私たちは人間の行動，特に理解に苦しむような行動を動機づけるものが何なのか知りたいのである．一例を挙げよう．2021年の1月から4月の間に少なくとも六件の銃乱射事件が合衆国では起こっており，その多くで銃撃犯の動機はいまだ解明されていない[1]．このような悲劇的事件に焦点を当てたいわけではないが，こうした出来事ゆえに私たちは悲しむとともに混乱し，人間的な動機を理解したいと思うのである．私たち自身の生活をめぐる状況さえ，私たちを突き動かす．現在のパンデミックのインパクト，そしてCovid-19が予測できない仕方で私たちの行動と精神的健康を形づくった過程を考えてみよう．例えば，アメリカ心理学会が実施したアメリカで進行中のストレスに関する調査によると[2]，私たちの多くは次々生じるパンデミックの影響に引き続き苦闘している．最新の調査結果が示しているのは，パンデミック以降，成人の大多数がより多量の飲酒をし，体重が増加し，睡眠時間が本人の希望より長時間化したり短時間化したりしているということである（[2]”Key Survey Findings” より）．もっとも，この種の調査は私たちが何をしているかを伝えているだけで，(パンデミックのストレスに対する全般的な行動反応ということ以外には)行為の背景にある動機を必ずしも伝えてはいない．

この誤情報と偽情報の時代において[3]，ソーシャルメディアとその切り抜きは，こうした人間行動について各種の仮説，理論，説明（誇張され，扇情的で，誤解を招くような説明でさえ）の例を重ねて飽きることがないようだ．それが恐るべき銃乱射事件の説明になっているか，私たちが抱えるパンデミックのストレスの背景にある理由と原因の説明になっているか，にはお構いなしである．問題は，これらの「説明」がしばしば誤解を招くものであったり，あからさまな誤りであったりすることだ．実際，先日ニューヨーク・タイムズが伝えたところでは，よく使われる複数のソーシャルメディアの投稿が，未確認で無効な国民健康データベースを証拠として引用

しつつ，Covid-19 ワクチンが Covid-19 ウイルスそれ自体と同程度の死者を生じさせたと主張しているという[4]．ここには心理学が介入できるギャップが広がっている．厳密な方法論に則った応用心理学なら，良質なものと悪質なものを分離し，事実または知識を見分け，人間行動とその背景にある動機に関する意見や誤情報からそれを区別し，私たちを助けてくれると思われるのである．このようなわけで，心理学にまつわる私たちの問いはその方法をめぐる問いにある．心理学の方法は本当に良質なものと悪質なものを分離し，両者の違いをより正確に述べることができるだろうか？ 行動科学において信頼されている科学的方法を通じて，私たちが求める人間行動についての各種の事実と知識に接近できるだろうか？ 人間の行動と動機の意味を把握しようとして科学的方法が用いられるとき，その方法は本当のところ何を得ているのだろうか？

大体において，最も著名な方法は仮説化された因果関係に接近する（そして文書化する）目的のため，最初からすでに構造化されているのを私たちは知っている．すなわち，人間の行動と動機に関して調査後に与えられる説明は，因果的枠組みのもとで様式化されることが予め決まっているのであって，それというのも，方法それ自体がそのように構造化されているからである．このような因果的説明の優位性と，行動科学における経験主義的／実証主義的方法論への因果的説明の埋め込みを目にしながらも，私たちは他方で，心理学にはより広い方法論的伝統があり，多くの学者が方法論の多元性を認め論じていることも知っている[5][6][7][8]．つまり，量的な伝統と質的な伝統がともに存在することを知っているのである．とはいえ，行動科学において確立された方法であり，信頼性と妥当性のある証拠固めをするものとして頼りにされているのは依然として量的方法であって，経験主義と仮説演繹的で因果的な枠組みの伝統に根ざしたものである[9][10][11][12][13]．実際のところ，証拠に基づく知識固めをするのに用いられるそうした量的方法の一例は，心理療法におけるエビデンス・ベースの実践を確立するのに用いられる，二重盲検のランダム化比較臨床試験である[14][15][16]．このような量的研究デザインは真正の実験デザインであり，変数間の仮説的因果関係を分離して知覚できるために最初に称賛されるのである．

著者たちの見るところ，問題は，仮説化された因果関係を強調することで，予め推定された原因の観点から行動をつねに説明してしまう点にある．言い換えると，状況や環境の中に潜在する原因がもたらす結果として解明されるものとして，人間の行動と動機を私たちはつねに枠づけて（それゆえ事前に一定の傾向のもとで見て）いるのである．例えば，Covid-19 の隔離期間中の体重増加は，Covid-19 の状況内部にある影響力や原因（例えば孤独によって増大したストレスといった）の結果として枠づけられる――そして隔離の孤独が体重増加を引き起こすとの結論が与えられるのである．この種の説明は心理学だけでなくその外部でも蔓延しており，一種のあるべき品質を備えるに至っている．言い換えると，量的で科学的な方法に支えられた説明であれば，私たちはそれを見過ごし自明なものとして受け入れているのであって，説明そのものが持つ意義や，そこに含まれうる虚偽の前提について，立ち止まって考えることをほとんどしない．この自明性の一つの理由は，因果性それ自体と，因果性の持つ当然の意味に関する人々の全般的な信念に関連があると著者たちは考えている．この点は後に言及する．

著者たちが問題視しているのは，この認識論的かつ実践的な当然性，また，人間行動にとって説明と原因の占める重みが心理学において十分に理解されていないことである．主流派の心理学で（特に確立された方法論的観点のもとで）ほとんど考慮されていないのは，個人が自らの状況に直面して選択することで行なった行動を理解（understanding）するということである．この理解を通じて，私たちは個人の行動にとって意味ある動機づけの文脈を把握することができる．端的に言って，人々が自らの行動と動機を補強するような意味を作り上げる役割を果たしているような場合でさえ，自らの文脈と状況の中に置かれた行為主体として人々が見なされることはまずない．行動の背景にある意味と志向性，および人間の持つ動機を理解したいと望むのなら，私たちには別のパラダイムが必要である．個人が受動的に従っている外部の因果的な力を強調するのではなく，別の見方を取る必要がある．異なった方法論的枠組み，それも量的なもの

ではなく質的なものが必要なのである．

本章ではまず，行動科学において受容されている科学と方法論の見方の歴史的文脈――上述したような研究デザインへのより伝統的なアプローチ――について，「人間科学」のアプローチを求める歴史的な基礎づけと対比しながらふり返る．両者の違いはまさに，人間行動を原因／結果の観点から説明する試みと，人間行動を有意味な目標／志向の観点から理解する試みとを区別する歴史的な端緒である．第二に，特別な種類の質的方法論である実存現象学的研究（Existential Phenomenological Research, EPR）を代替的な質的アプローチとして提供する．実存現象学的研究は人間の経験を研究するうえで十分に最適化されており，それを因果的に説明するのではなく共感的に理解することを可能にする．第三に，実存現象学的研究を支える実存的な枠組みをさらに洗練させて，質的方法の中により良く位置づけ，個人の主体性を具体的状況において明確化できるようにする．別の言い方をすると，私たちの方法を用いればサルトル[17]（pp. 217 ff）〔邦訳第 I 巻 533 頁以降〕が「純化する反省（purifying reflection）」として記述したものに研究者も接近することができる〔訳注：サルトルの purifying reflection, réflexion purifiante には「純化する反省」と「浄化的反省」の訳語があるが，本稿では「純化する反省」に統一した〕．状況とその意味が主体に対してまさに現れるような仕方で，文脈や状況内での主体の志向性（または行為者の指向）を識別することが研究者にもできるようになるのである．

1．二つの代替的な「科学論」――自然科学的アプローチと人間科学的アプローチ

アカデミックな心理学の歴史を通じて，非常に奇妙なことが起こっている．科学的であろうとして，心理学者たちは自分たちの理論を断固として観察に基礎づけてきたのだが，それは観察の一つの様式，すなわち感覚に基づくデータを記録するという様式に本質的に限定されてきたのである．歴史的に見れば，これはまったく奇妙なことというわけでもない．というのも，科学では「経験主義（empiricism）」が登場し，ある人の発見は机上の空論や「第六感」的な直感ではなく，研究対象との感覚的な接触に基づいて行われるものであると意味するようになったからである．心理学という科学にとっての不幸は，私たち研究者が今日自己自身を見出す状況にある．それは，主題への最も直接的かつ忠実な接近法を提供しうる，まさにそのような知覚の様式を研究者としての私たちが捨ててしまった状況である．実際，心理学の歴史の大半を通じて，私たちは人間と動物を「科学的」な検証のための単なる「対象」とみなし，それを物質的側面に還元可能なもの，物理学，化学，生物学の法則によって支配されているものとしてきた．だが，「主観（subject）」または主体（agent）としての私たちの本性についてはどうだろう？ 主観的経験や主体的行動は，科学としての心理学の視野にはどのようにして収められるのだろうか？ 心理学がその使命を遂行するうえで，科学する方法をひとつ以上に必要とはしていないだろうか？

ブレンターノ[18]は，諸科学の領域を内容よりも接近法（access）に基づいて区別した最初の人物だった．すなわち彼は，科学の内容または主題の規定を，その内容を明確化するうえで活用される接近法の様式に即して位置づけたのである．物質的現実・生命体・感覚ある存在の領域に沿って（これはフッサール[19]とメルロ＝ポンティ[20]が現象学的探究のための「領域的存在論」として後に整理した通りだが）物理科学・生命科学・社会科学を区別するのではなく，諸科学をその「アプローチ」（ジオルジ）に沿って，方法論に従って与えられる「意味領域」（シュッツ）へと区分けしたのである．ブレンターノによると，「外的知覚」は感覚を介して物質的自然の領域（生命それ自体も含む）への接近を私たちに可能にする．一方で，「内的知覚」（これを「内観（introspection）」と混同してはならない）は，心理学の領域をもたらす．心理学の領域は，感覚に還元することのできない「直観」（anschauen あるいは「見ること」）を介して私たちに与えられるのである．ディルタイ[21][22]なら，この「内的知覚」を「理解（Verstehen）」――この語はおおよそ「共感的理解」と翻訳できるが――として明確化するだろう〔訳注：かつては Verstehen を「了解」と訳すことが多かったが近年では「理解」という訳語が定着しつつあるため，本稿でも「理解」で統一した〕．

ブレンターノおよびディルタイとともに，心理学的な

ものの領域は，19 世紀の唯物論的な基礎とその伝統から派生した生理心理学の外側へと拡がり，ディルタイが「人間精神の科学」と名づけたものへと至った．ブレンターノとディルタイが（そして後にはジオルジが）発展させたのは，じつに全く新しい心理学のアプローチだった．ハイデガー[23]が彼独自の生の哲学の生成と関連して書いているように，「問題は，古い理解のしかたの枠内で……新たな概念を獲得することにあるのではない．その反対に．根源的に異なる様式のもとでの理解へと……（自己自身に呼びかけ）気遣うことにあるのだ」（p. 139，強調は引用者）．

興味深いことに，ブレンターノが主著『経験的立場からの心理学』[18]を執筆してからほぼ一世紀後，ロロ・メイ[24]が，アメリカ心理学において両者の区別を「人間のディレンマ」と名づけた枠組みにおいて蘇らせている．すなわち，私たちの主題（人間）は「主観」としてと「客観」としての双方においてアプローチできると述べたのである．ところが，今日においてさえ（さらに 50 年以上が経過したことになるが），心理学者は人間的現実に対して，それがあたかも心理学にとって「客観」でしかないかのようにアプローチし続けている．「心理学において心（Psyche）を守ること」と題されたアメリカ心理学会ロロ・メイ賞受賞講演において，キーンはその所見をこう述べている．

> 科学であること，すなわち，問いではなく答えを求める方法であること，感受性ではなく技能を生み出す方法であることが，罪の起源なのかもしれない．しかし，科学を批判しても決して十分ではないし，意義があるとも言えない……私たちは，心理学者として，私たちの保持する諸価値が自らの仕事に関係ないと偽装するのではなく，諸価値に資するよう意識して科学を用いる必要があるのだ．心は，アメリカ心理学における干し首になり下がった．心理学では，社会の問い，歴史の問い，人生の問いへの感受性を求めることがあまりに稀になっている．（p. 225）

では実際のところ，心理学における心はどのようになってしまったのだろうか．

1-1. 問題の歴史――新たな「科学論」の必要性

さかのぼると一世紀以上も前になるが，ディルタイ[21]は実質的に科学を行うにあたって根本的に異なる二つの方法を対比させている．自然の秩序にとっては「説明（explanation）」（原因－結果を求めること）がその方法となり，「人間精神」（human spirit，Geist）にとっては「理解（understanding）」が必要とされるであろう，ということである．二つの領域それぞれが独自の「科学論」（Wissenschaftslehre）〔訳注：「知識学」や「学問論」と訳すこともある〕――あらゆる学問における「何を」（存在論的前提）と「いかに」（認識論的指向）をともに定義するのに役立つ哲学的基礎づけ――に値する．実際，ディルタイは，ブレンターノがフィヒテ『全知識学の基礎』[26]の仕事を発展させて作った道案内に従っている．『全知識学の基礎』は，ブレンターノとディルタイが登場する一世紀前に，科学と哲学の言説へと「科学論（theory of science）」を最初に導入したのだった．

「人間科学」アプローチの支持者が本質的に論じたのは，探究の「何を」が人（person）であるとき，そこに接近するための「いかに」もそれに応じて調整せねばならないということである．たとえば，人間が無機物や分子とは根本的に異なると考えるのなら，私たちのアプローチもそのことを考慮に入れる必要がある．人というものが，自らの行う選択によって自らを定義するものであると理解されるのであれば，私たちが用いる科学的アプローチは，研究を進める生きられた状況内での人間的自由を，観察し時には発見さえできるよう仕立てる必要がある[27]．「精神（Geist）」および「精神の（Geistes）」（それぞれ「精神（spirit）」および「精神に帰属する（belonging to the spirit）」という意味である）という用語を導入することで，ディルタイは，ゲーテまで遡るドイツ的伝統を呼び起こしたのである．その伝統とは，研究対象として人間の「精神」と「精神による知の方法」(注 1)について，ともに同時に関心を持つというものである．この表現を英語に訳す際のひとつの問題は，「精神」という語が，科学論では必要とされない宗教的含意を備えていることにある．ディルタイは，精神科学（Geisteswissenschaften）または人間精神の科学を発展させるにあたり，その原理を，人についての経験科学がその上に基

礎づけられるようなものに制限している．

ディルタイにとって人間とは，社会的・歴史的・文化的な生の文脈にその根を持つものとして最も良く理解されるのであって[21]，これらの文脈から人為的に切り離して理解されるものではない．それゆえ，ディルタイは，自然界における他の物的対象と同様に人間もまた自然法則の因果的諸力に従っているとする経験主義者／実証主義者の主張には同意しない．言い換えると，人が人であるのは，つねに文脈づけられ，「生の全体」[28]（p. 72）〔邦訳第一巻 243 頁〕に埋め込まれてあることにおいてなのである．全体性，もしくは社会生活における包括的なゲシュタルトの経験の強調もまた，ディルタイが知の基礎として経験上の感覚を強調する実証主義者と経験主義者を拒否した理由である．ディルタイは，事象と他者についての私たちの経験がそれ自体で全体的だと論じている．私たちが環境内で他者や事物に出会うとき，感覚の細切れ（経験主義者が主張する色の斑点のような生の「センス・データ」の細切れ）に出会っているのではない．そうではなく，私たちは意味のある全体，ゲシュタルト心理学者たちが地に対する図として後に記述することになるものに，直接出会っているのである[29]．これこそが還元不可能な「生の表出」というディルタイの概念，すなわち，私たちは分断された感覚印象の混沌ではなく意味深く理解可能なゲシュタルトであるような，豊かで秩序だった現象学的経験の中に埋め込まれているという概念の始まりだったのである．

自然科学と人間科学のアプローチのこうした区別を明確化しようと試みて，ディルタイはこう記している[21]．

> 説明心理学の代表者たちは，（説明的な「原因と結果」）の仮説を大規模に適用するのを正当化するため，物理学や自然科学の例を持ち出すのがつねである．しかし，本研究の冒頭であるこの場所で，次のことを確定しておこう．つまり，人間科学はその対象にふさわしい仕方で独自にその方法を決定する権利を持つということ，これである．……人間学（精神科学）は，何よりも次の点で自然科学から区別される．すなわち，自然科学が対象とする事実は，外から意識に対して現れ…しかも（観察者から）孤立して与えられる．これに対して人間学が対象とする事実は，実在として，生き生きした連関として，内からありのままの姿で与えられる．……われわれは自然を説明し，心的生を理解する．……心理学における仮説は，けっして自然認識におけるのと同じ役割を果たしているのではない．自然認識においては，あらゆる連関は仮説の構築によって成立し，だが心理学においては，まさに連関なるものは生きられた経験においてつねに根源的に与えられている．生は，いつも連関または一貫した全体として現に存在する．（p. 27）〔邦訳は 642-643 頁〕

実証主義者や自然科学の支持者が物的対象の知覚経験を分析しようとしたのと同様に，ディルタイは，生きられた経験に内在する意味，人間経験の「連関」や「一貫した全体」に含まれる意味を分析することを提案する．人間科学を特徴づけるこの並行過程をディルタイは理解（Verstehen）または理解（understanding）とした[21]（p. 52）．言い換えると，「人間科学」的な心理学に固有の焦点は，理解を通じて意味深いものなった「生の表現」であろうし，さらに言うなら，このような共感的理解こそ，人間諸科学における正当な知の基礎とみなされるのである．ディルタイが述べたところでは，理解することにおいて私たちは精神に備わるすべての能力――――感覚する，判断する，想起する，想像する，直観する，感じる，思考する――を用いる[21]（p. 55）．だとすると，「科学的心理学」の学徒として主題との出会いに向かっていく際，感知や直観や想像といった他の様式を排除し，センス・データと合理的説明だけが信頼に値すると主張する切り詰められた認知的アプローチを採用するよう私たちがしばしば教わるのは，なんと皮肉なことであろう．日常生活において私たちが周囲の他者の行動を観察したり，自分自身の行動を観察しようとするとき，私たちは単に感覚を信頼することや，単に因果関係を引き起こすこと以上のことをしている．人間（および動物）の領域にアプローチする際，私たちは洞察や驚きといった能力も用いているのである．実際ディルタイにとって，精神に備わるあらゆる力を合わせて行われる理解というこの反省的方法が明らかにしてくれるのは，究極的には「人の神秘（secret）」[22]（p. 177）であった．

ヴント，ミュンスターバーグ，ジェームズ，フェヒナーといった初期の心理学者たちはみな，自然科学の導きに従った実験に基づく心理学という科学だけではなく，人間または「文化」の心理学もあるのだと主張していた[30]．ミュンスターバーグ[31]は心理学における二つの科学を展開した――心的事象の因果的決定論に基づく説明心理学と，人間の意図を理解することに基づく目的心理学である．ウィリアム・ジェームズもまた，とりわけ『宗教的経験の諸相』[32]において，自然主義的でない心理学の展開を試みた一人だった．最も興味をそそるのはフェヒナー[33]であろう．彼は，

> 「昼の見方」と「夜の見方」を区別し，これらが現実の二つの側面に対応するとした．昼の見方においては，あらゆる事物が魂を持ち，意識をともない，生き生きとしている．他方，夜の見方においては，あらゆる事物が物質的である．昼の見方は「内なる立場」であり，一人称の立場であるのに対して，夜の見方は「外なる立場」であり，三人称の観点である（Heidelberger, 2004, p. 97 による[34]）．フェヒナーは昼の見方を拡大し，存在するあらゆる事物が内面を持つとした．それゆえ，フェヒナー（1860/1966）[35]は精神物理学をこう定義するのである．「肉体と魂の，さらに一般化して言うなら，物的なものと心的なもの，物理的世界と心理的世界の，機能的に独立した関係性についての精緻な理論」[36]．

実際，アルンハイム[37]によると，フェヒナーは一方では「経験主義者」であり，他方では「信仰厚き汎神論者であり，これまで書かれた中で最も詩的なエコロジーを私たちに残してくれた人物」（p. 857）である．心理学史における初期の学者たちを見るにつけ明らかになるのは，アカデミックな心理学の風景にデカルトの遺産が残した足跡は決して小さなものではないということである．

20 世紀初頭において，ディルタイの共感的理解の概念を大事にして人の研究に接近し（ケーラー[38]に見られるように，人だけでなく霊長類にも），デカルトの二元論を克服しようと継続的に努力していたのは，精神分析学者，ゲシュタルト心理学者，そしてドイツの精神医学者たちだった（これらについては，後にフッサール[19]とメルロ＝ポンティ[20]が現象学的探究のための「領域的存在論」を整備していくことになる）．しかしながら，行動主義が科学的心理学の分野を席巻すると[39][40][41][42]，行動の科学に対するこれら「障害物」の居場所は一掃されてしまった[43]．

それでは，ディルタイの人間科学のアプローチはどうなってしまったのだろうか．

1-2. 現代の心理学――人間の主観を作用因へと還元する

現代の心理学者たちは，理解と意味を強調する人間科学の伝統を無視し，説明と因果関係を強調する自然科学の伝統を好む傾向がある．言い換えると，自然主義的な定式化（すなわち原因と結果による説明）と量的アプローチを特権化する傾向があるということである．この傾向がとても強いため，私たちが「因果関係」に訴えるとき，それは典型的にはアリストテレスが作用因（efficient cause）としたものを意味するようになっている（行動科学における因果性に関するより入念な検証については［44］を参照）．

行動科学における作用因は，前件と後件，時間を横断する線形的な関連性を強調する（［13］［45］も参照）．ただし，アリストテレスはもともといかなる結果にも四つの原因を考慮したことに留意することが重要である．因果性にはこうした複数の意味があるにもかかわらず，心理学においても現代文化においても，私たちは因果性についての直接的な認識をひとつだけに，すなわち作用因だけに狭めてきた．私たちが論じるのは次のこと，すなわち，前件と後件との作用因という因果関係の意味は行動科学・社会科学・文化のいずれにも深く浸透しており，異なる種類を想像するのが私たちには難しくなっている，ということである．前件と後件という観点から見た直接的で暗黙の因果性理解は，シュッツ[46]が沈殿した信念として記述したものに沿っている．沈殿した信念とは，科学の領域から日常の言説へと転化し，とても深く浸透したがゆえに当たり前になった信念を言う．この種の因果的枠組みが自然科学の（量的な）方法論に組み

込まれていることはすでに見てきた通りである．たとえば，実質的な実験や疑似実験の計画において独立変数（independent variable, IV）と従属変数（dependent variable, DV）を結びつける関係性が作用因であるが，量的方法においてこの種の因果的関係性が明示的に特定されることは稀である．実際のところ，明示的な特定はおそらく無駄で不要なものとみなされるだろう．しかし当然のことながら，独立変数と従属変数の因果的関係性が広く受容されているため，量的方法論の枠内ではそれが沈澱して当たり前の前提となっていることに背いてしまうのである．ラドニツキー[47]はさらに言及して，科学実践における発想の「石灰化」と呼んでいる．このようにして，因果関係は私たちの前に現れていながら，同時に視界から隠されてもいるのである．たとえば，私たちは，因果関係についての日々の文化的理解においても，伝統的な方法論の観点からしても，虐待のような早期の有害な出来事が不安や抑うつを「引き起こす」と推定する[48][49]．

このように作用因が優勢になってしまったことで，アリストテレスがあげた他の三つの原因――行動科学と社会科学で周辺化され忘却された諸原因――はどうなったのだろうか．作用因に加えて，アリストテレスは，何かを構成する素材や物質を指す質量因，形・型・様式もしくはアリストテレスが事物の「本質」としたものを指す形相因，そして最後に，何かがそれを目指すところの結末・目的・目標を指す目的因，を導入した．アリストテレスにとって，人間の行動を含め，何らかの実体・行動・現象を説明するうえで，これら四つの原因すべてが必要なのである[13]．アリストテレスが四つの原因を強調したにもかかわらず，行動科学において最も一般的な説明は，作用因と質量因だけに通例では切り詰められている[44]．このような縮減が生じたひとつの理由は，心理学が自然科学的アプローチを強調し，そこでは，経験的観察がしばしば質量因および作用因的な説明と結びついてきたことにある．実際にも，神経生物学的な構造および／または化学に訴えて人間行動を説明するような質量因的説明が行動科学では一般的になっている．私たちが示唆しているのはこうした説明が間違っているということではなく，こうした説明が自然科学的な説明の形式から派生してきがちであるということである．

私たちの考えでは，理解と意味を重視する「人間科学」の観点から人を全体として研究するということが，忘却され，周辺に追いやられてきたのである．私たちが読者に乗り込むよう呼びかけたいのは，「自然の科学」と考えられるような心理学ではなく，物質還元主義や数学的定式化へと縮減することのできない精神的または人間的秩序の科学としての心理学なのである．この人間科学的アプローチは，人間の行動と経験を作用因と質量因に還元するのではなく，自由意志を全体像の中に取り戻すことを本質的な方法としている．確かに，私たちは自らが置かれた状況に左右されるが，私たちの経験と行動はそれらに還元できるわけではない．生物学的・環境的・社会的な影響を考慮はするものの，個人についての理解をそうした集団的な「原因」へと還元することは避ける．私たちの考えでは，次節で紹介する実存現象学的研究方法こそ，人間科学のヴィジョンを最も実りあるものにする最良のアプローチである．

2．現象学的に心理学する――自然科学の伝統に代わる「人間科学」

ジオルジが『現象学的心理学の系譜――人間科学としての心理学』[12]という画期的な著作を執筆した当時，質的研究法（という表現が一般に用いられる前だったが）の開発に関心を持つ多くの心理学者が現象学に目を向け始め，「自然の」科学ではなく「人間の」科学としての心理学に哲学的基盤を与えようとしていた．メイら[50]はすでに，実存的精神医学者（ビンスワンガー，ミンコフスキー，シュトラウス，フォン・ゲープザッテル）の仕事を彼らの基礎的なテキスト『実存――心理学と精神医学の新しい視点』に取り入れ，臨床心理学における舞台を整えていた．しかし，実存的現象学の文献に根ざしながら質的心理学の研究方法の開発に真に焦点を当てていたのは，1970年代にデュケイン大学にいたジオルジとその同僚および学生たちだった．現象学に基づく質的研究の発展に寄与した他の拠点としては，ダラス大学，シアトル大学，セイブルック大学，テネシー大学があげられる（この歴史の詳細については，［51］およびChurchill, Aanstoos, & Morley, 投稿中を参照）．

本章の2名の執筆者のうち，チャーチルは過去40年間，フィッシャー＝スミスは過去20年間にわたりダラス大学で現象学的方法を教え，卒業論文プロジェクトに応用するべくその発展にたずさわってきた．というのも，学部が創設された1972年以来，心理学を専攻するすべての学部生が心理学における総合試験として現象学に基づく卒業論文を執筆するよう求められてきたからである．最近では，チャーチルが過去40年にわたる学生との協働に基づいて，入門的な教科書『実存現象学的研究のエッセンシャル』[52]をAPAブックスとして上梓したところである〔訳注：APAはアメリカ心理学会（American Psychological Association）の略称〕．この教科書の目的は，主にアメリカ・カナダ・ヨーロッパの環境で，実存的現象学の文献研究と経験的な心理学研究への応用を半世紀行いながら私たちが皆で学んできたことを集約することにあった．

この方法の基本ステップは，自然主義に基盤を持つ実験心理学が発展させてきた科学の考え方とは根本的に異なる心理科学についての理解で満ち溢れている（心理科学における自然主義の歴史についてのさらなる考察は，［7］を参照）．存在論的な枠組みを発展させ自由・選択・超越といった実存的概念を前面と中心に置き，それにより，研究者が生きられた経験を分析する際の手ほどきとするのである．サルトル[53]（p. 91）〔邦訳166頁〕[17]（211-237）〔邦訳第Ⅰ巻533-546頁〕は「純化する反省」としての現象学的還元を提示したが（心理的決定論と自己欺瞞を生じさせる「不純な反省」と対照させて），このことにより，シュッツが「目的動機（in-order-to motive）」と「理由動機（because motive）」として言及したものを理解するための扉が開かれる．

アリストテレスの「四原因説」の用語を用いてまとめておこう．従来の実験的研究の方法は，人間の行動と経験の「質量因」および「作用因」を探索する．これは操作化または観察可能性という要求（すなわち質量因）の中に，そして処置変数と従属尺度との間に仮定される原因と結果の関係性の中に求められるものである．実存心理学は現象学的な基盤を備え，人間の行動と経験の「形相因」と「目的因」をむしろ目指すものである．後者のアプローチは，さまざまな「種類」の経験に備わる「本質」（すなわち「形相」）に到達すること，また，人間行動に内在する目的論において明らかにされるような，私たちの行動の真の「動機」を把握することに関心を持つ．与えられた状況内であれこれの行動によって成し遂げられる目標（つまり「目的」）を私たちは最終的に問題にするのである．

資料1：実存現象学的研究のプロセスの概要

1. リサーチクエスチョンを策定する
   (a) 一般的なトピックの領域を見つける
   (b) 予備的な反省と調査を行う
   (c) トピックを展開する：探求すべき状況を見つける——あなたが研究しようと望んでいる生きられた経験はどのようなものか
   (d) そこで何を発見したいのか：研究の「何について」を特定する
   (e) そうした研究の「何のために」，または心理学の研究文献に対して持つ関連性を問う．

   ハイデガー[28]による探究の構造についての三重の視点からの分析，そして，学部生の卒業論文プロジェクトを長年指導してきた著者らの経験からしても，心理学的に研究すべき現象と，それを明らかにする生きられた経験とは区別される[54]．

2. リサーチクエスチョンを策定する作業の補助として，関連文献のレビューを行うことが重要である．場合によっては，文献レビューを行うことでリサーチクエスチョンが生じる出発点になることもある．ディレンマ，意見の一致しない領域，不確定なもの，未成熟な帰結に終わっているものを探してみよう．文献レビューを通じて，当初策定されたリサーチクエスチョンにさらに磨きをかけ，「研究関心についての洗練された声明」と呼びうるものにしていく．

3. 経験的アプローチによってデータ収集を行う．フォン・エッカーツバーグ[55]による「協力的対話」としての研究インタビューの考察にならい，共感の役割をより良く理解し，生きられた状況に備わる「意味を把握」しながら深く傾聴するための扉を開く．

4. 「現象学的」な研究は，自己報告からなるデータを基礎としていることで定義されるのではなく，自己報告のデータについて特別な反省の方法があることによって定義される．データ分析への現象学的アプローチで求められるのは，現象学的「還元」に続く「本質直観」を経て現象を発見する仕方である．ここで問われるのは次のことである．記述されたものを読む際に私たちは何をしているのか，情報提供者の言葉に対して私たちはどのように注意を向けているか，私たちはどのような存在論的前提を持っているか，私たちの所見に忍び込んでくる望まざる先入見にどのように対処するか．

5. データ分析の課題を進める際，現れつつある現象について考察を始めてみよう（採石場で見つかった大理石からミケランジェロの彫刻が現れてくる場合のように）．データ，すなわち生きられた経験に埋まっている形相（つまり本質）――さまざまな状況におけるすべての事例に共通するもの――とは何だろうか．不変にとどまりそうなものは何だろうか．個別レベルと一般レベルの双方の分析において，予備的な反省を形作ってみよう．
6. 所見について発信する：研究レポートを執筆する（[52] pp. 73-77 を参照）．

2.1．実存現象学的研究における哲学の本質的な役割

実存現象学的研究（EPR）のパラダイム全体は，それがひとつの方法になる前にまずは哲学的アプローチとして発展してきた．ディルタイ[21]が人間科学の基盤を明確にしつつあったのと同じ頃，フッサールは先駆的な論理学の分析を行っており[56]，それが哲学的現象学の方法の最初の概論[57]への道筋をつけることになった．ジオルジは最終的にディルタイの夢を具現化しようと試みた人物ということになる．

かつてフッサールが現象学にとってのいわゆる「鬨の声」――「事象そのもの」へ――を発して以来，私たちが関心を寄せる事象のまさに本質を求めることが問いとなり，また，そうした事象に接近する固有の様式が問いとなった．フッサールにとって，私たちが還帰すべき事象とは「意識の出来事」だった――フッサールはこれを「志向性」の概念のもとでまとめて擁護した[57]．この語が意味するのはある状況内での単なる志向や目的よりずっと複雑だが，読者はこのアイデアから，人間行動（知覚する，想像する，想起する，感じる，意志する，出会うといった行為を含む）にはそこで達成されるべきある種の目的や「目的因」が常に存在するとの代替案を得ることができる．フッサール[57]による有名な一連の「還元」は，「現実」（「外的世界」で生じる「物事」「事実」「出来事」からから成るもの）から，人間の主観性すなわち「心的現実」の「内的世界」を構成する内在的領域へと，「私たちを連れ戻す」（re-ducere）ものである〔訳注：還元は Reduktion の訳語で，「再び導く」「連れ戻す」を意味するラテン語の reducere に由来する〕．私たちは「還元」という用語を採用するが，ただしそれは，現象学的研究が，経験を意味あるものとして把握できるようにする志向作用へと私たち自信を連れ戻すものである限りにおいてである[(注2)]．意味あるものとは，日常経験の流れにおいて「より深く」「潜在的で」「暗黙の」何かを指している．注意すべきなのは，「志向的である」という語が決して「意図する」ということを意味しない点である．志向性という概念は哲学から借りてきたもので，私たちは自らの心的な生において，経験される世界へとつねに意味深く指し向けられているということを示唆するのである．この方向づけまたは「志向性」は，最も単純な経験でさえも，意味を促進する私たちが現前するという刻印をつねにすでに帯びている，ということを認める方法である．私たちの経験を意味あるものにしているのは，行動と経験にともなう隠れた志向性なのである[52]（pp. 7-8）．

志向性を観察し主題化することが現象学の目的となった．これはまた精神分析の目的にもなった（フロイトがブレンターノのもとで哲学を学んだ限りにおいて）〔訳注：ブレンターノは心理学の基礎的方法として「志向性」の概念を位置づけた最初の人物で，フロイトはウィーン大学でブレンターノの講義を聴講していた〕．事実，フロイト[58]はその悪名高いドーラの症例において，臨床症状の意味を把握する方法を私たちに伝えるべく，「意味」（p. 34），「動機」（p. 35），「志向」（p. 37）という用語をほぼ同義で用いている．これはすでに夢の意味についても彼が実践していたことである（[59]，他に [60] pp. 69-70 も参照）．精神分析と現象学を同族の学問にしているのは，両者がともに，心的な生の表現において露わになる潜在的内容に関心を持っていることにある．両分野のこうした「交差検証」から，メルロ＝ポンティの有名な言明――「現象学と精神分析は平行的ではない．それどころか，両者はともに同じ潜在性を目指しているのだ」[61]（p. 87）――も生じてきたのである．これが実存現象学的研究（EPR）にとって意味するのは，私たちの把握している何ものかが記述の表面にではなくその深層に横たわっているということである[52]（pp. 8-9）．

次の抜粋について考察してみよう．孤独の経験について記述したプロトコル（分析前の生データ）からのものである．

2019年の夏休み，私は大学4年生に進級しようとする年で，その夏の間ずっと両親の家で過ごしました．学校が休みになって帰省する時，私は実家のゲストルームで過ごすんです．というのも，幼い時から大学に入るまで一緒の部屋だった妹が，自分ひとりでその部屋を全部使いたいと言って模様替えしてしまったんで，私のベッドさえその部屋にもうないんです．このこと自体は全く問題なくて，実際に高校3年の終わり頃にかけて，夜遅くまで勉強をするために時折ゲストルームで寝始めていたし．だから，妹よりかなり遅くまで起きている時でも，妹が寝るのを邪魔してはいませんでした・・・〔でもその夏は〕社会的なやり取りから少し離れ始め，自分の部屋で多くの時間を過ごすようになりました．家の周りで見つけて前々からやりたいと思っていたことや忘れかけた趣味で，自分自身を満たそうとしたんです．毎日午前3時頃に眠りに落ち，午後1時頃に起きるのが日課になりました．というのも，家の他のみんなが寝た後も夜更かししているので，どこかに行くことも，誰かと関わることも，何かに参加することも求められないで済むからです．意図的に孤立しようとしていたわけではないのですが，家にいることにどこか居心地の悪さを感じ始めていました．

この孤独の研究に対するヘインズ[62]のアプローチにとって重要だったのは，研究参加者の記述の中に潜在的な志向性をとらえることだった．つまり，参加者の言葉で直接に明らかにされたものよりも，さらに一歩先へと分析を進める必要があった．心理学的研究における意味と理解は，言語の多義性と矛盾の可能性を考慮すると，参加者の語りやデータに明示的には与えられていないものにしばしば依存する．時には，参加者が「否認」や不在といったしかたで，実際にはその場合に該当しない何かを伝えてくる[63]．ヘインズの研究参加者が「意図的に孤立しようとしていたわけではないのです」と述べるとき，研究者はその語りの中に否定や反意を聴くことができ，それゆえ，この参加者が結局のところ，故意にではないにしても孤立している当事者であると「見て取る」（あるいは理解する）ことができるのである．参加者の反意を研究者が見聞きできるかどうかは，データを全体として説明できるかどうか，つまり記述全体の観点から抜粋を見ることにもちろん依存する．

次の分析において，ヘインズ[62]は生きられたものとしての経験に忠実でありながら，参加者の潜在的な志向性をとらえることができている．

参加者の孤独の経験は，彼女が実家でゲストルームへと退く文脈において現れてくる．これは以前の人生全体を通じて快適に感じられていた馴染みのある文脈である一方，参加者の「落ち着かず場違いな」感じや，今までなかったしかたで現れた，近しい家族との間の驚くべき（逆説的な？）関係上の距離へと気持ちを向ける文脈にもなっている．そのため，参加者の孤独の経験は，他者との対人関係からの，特に近しい家族からの，広がる物理的かつ心理的な距離として生きられた．彼女の孤独と他者からの生きられた距離には，倦怠感とやる気のなさがともない，こうした感じに彼女は自分を奪われている．容赦なく襲うこうした情動と絶えず続く孤独感に直面して，参加者は帰属感の喪失を経験している．参加者の孤独の経験の核心にあるのは，家族の間にあってさえも生じるこの帰属感と居場所の喪失なのである．この喪失と向き合う中で彼女は社会的に疲れ果て，「自身の仲間」へと避難していく．彼女と他者の距離が孤独によって広がっていくと，それが緩衝材となって他者から彼女を守ることにもなり，無事で快適な「安全地帯」を生み出した．この「安全地帯」は参加者を魅惑するもので，これによって，自身と他者の分断を架橋するなどという乗り越えがたい課題に挑戦するより，社会的孤立という泡の中で彼女は保たれたのである．

本分析では特に最後の二文において，研究者が参加者の志向性へと自ら調律したのを見ることができる．より「事実上」に近いしかたで参加者によって提示されたもの（例えば「社会的なやり取りから少し離れ始め…」）が研究者によって次のしかたで解明されている．すなわち，「安全地帯」のより深い意味に光が当てられ，参加者が目的を持って，だが暗黙のうちに求めていた，他者から孤立

しつつも保護されるような場所として，その意味が明るみに出されたのである．

2.2. 存在論的基盤――人への「実存的」アプローチ

フッサールの学生であり弟子であるハイデガーによると，私たちを定義するのは，さまざまな可能性に対する私たち自身の自由な（だが常に状況づけられた）投企である．これは，「人間の自由の最も偉大な点は，いかなる状況下においても自分の態度を選択できる自由にある」とするヴィクトール・フランクル[64]の有名な主張を生み出した哲学でもある．実存現象学的研究（EPR）を用いる心理学者がデータを読み込んでいくための鍵のすべてを，次の原理に見出すことができる．（書かれたものであれ書き起こされた経験であれ）データ内のこの瞬間は，この人をとりまく状況と，人生のまさにこの瞬間におけるこの人に命を吹き込む投企とを，どのように明らかにしているのか．以下に見る通り，実存的探求のこの原理は，ハイデガーとサルトルの一節から正しく引き出されるのである．

「実存的」の語源

ハイデガーは名著『存在と時間』[28]の冒頭で「［人間存在の］本質は，その実存のうちにある」と宣言している．「実存」という語は，私たちが自らの存在に向かって，自らの「存在しなければならない（Zu-sein）」――すなわち「まだない」物事の状態――に向かって行動することの「いかに」に関連する〔訳注：『存在と時間』第九節を参照．ハイデガーは人間を「現存在」と呼び，現存在の本質は自らの存在可能性に関わりつつ存在する点にあるとし，また，このような存在のあり方を「実存」と名づけている．ここのZu-seinは現存在がそれに向かって生成すべき自らの本質に関わる〕．ハイデガーにとって，私たちは常に生成する過程の中にある．「実存的」という用語を私たちが自らの方法について用いるときに意味しているのは，身体性と時間を通じて，世界と関与し，他者と相互に関与する一般的な様式のことである．

ヘーゲルの有名な言葉遊び「本質とは，あったところのものである（Wesen ist was gewesen ist）」とは対照的に，ハイデガーは私たちの「本質」についての理解を，（まさに次の瞬間であるとしても）未来においてのみ見出すことのできる何か，すなわち自らの「存在しなければならない」へと効果的に方向づけ直した．そのような「存在しなければならない」は，私たちが自らをどのような状況に見出すかと不可分に結びついている．ハイデガーがこの代表作の残りの箇所を通じて焦点化しているのは，現存在の「存在性格」（p. 70）または単に「実存カテゴリー」と彼が呼ぶもの，つまり私たち自身が自らの存在へと向かう「かかわりかた」（p. 67）を構成しているものである．ハイデガーにとって，私たちが真に自らを見出すのは，「まだない」もの――「すでにあった」ものではなく――においてである（詳細と図解については［65］を参照）．

ハイデガーにとって，私たちが生へと「投げ込まれていること」の最も重要な側面は，私たちが「自己自身が投げ込まれている」をどう自覚するかよりも，私たちが可能性に向かって「自らを前へと投げ出すこと」，すなわち彼が「投企」（Entwurf）と呼ぶものにある．人間の実存は，つねに「被投的投企」（ハイデガー）または「状況づけられた自由」（サルトル）であると理解される〔訳注：投企と被投性について，詳しくは『存在と時間』第四一節を参照〕．データ分析においては，研究参加者がどのように自己自身を人生の状況の中に「投げ込まれている」と見ているか，という点に収集されたデータの焦点が当たりがちになる．実存現象学的研究者として私たちが挑戦するのは，こうした被投性の中で参加者がどのように可能な選択肢を見出しているかを見極めることである．

ハイデガーの実存枠組みの応用

近年の学生が扱った卒論研究のひとつで，気苦労（worry）に関するものの中で，ロンバルドッツィ[66]は研究参加者（仮名「マックス」とされる）について個性記述的な所見を報告している．マックスは，友人も家族も新たな仕事もないままに国をまたいで移住した後に生じた，麻痺するほどの気苦労の経験を言葉にした．ロンバルドッツィは，新しい外国の環境に投げ入れられたことにともなう参加者の苦闘と，可能性の収縮に映るものについて記述している．

マックスにとって気苦労というものは，それが自らを露わにした文脈がなければ理解できない．マックスの物語が始まるのは，彼がかつては保持していたもの（仕事，友人，経済的安定）が今や取り去られ，無職，友人の不在，生活費の増大によって置き換えられるというまったくの新世界においてである．彼の世界がこのように転換することが，マックスにとって気苦労のきっかけとなる．マックスは気苦労する新世界に自分がいるのに気づくだけでなく，問題だと考えるものに向き合うための解決策がないことに気づく．気苦労がマックスにとって意味するのは，自分自身を見出した新世界に適応できないということなのである．環境，他者，そして彼自身との関係は一夜にして変化し，気苦労が立ち現れる状況に自分がいるのに気づく．彼はまた，心配が「ありとあらゆるもの」へと広がっていくのに気づくのである．

ロンバルドッツィ[66]は気苦労の分析を進めるなかで次のことを見出している．マックスが気苦労のサイクルを断ち切って自らの可能性を見出すことができるのは，彼が気苦労そのものに向き合う時ではなく，気苦労のきっかけを作った状況，すなわち彼の世界に向き合うときである．

気苦労を克服する最初のステップとしてマックスが特定したのは「変わり果てたあらゆるものへの喪に服すプロセス」である．マックスにとって気苦労というのは，浮かんでは消える単なる戸惑いではなく，彼の世界および他者との関係性に深く根ざした経験である．気苦労は実存における変化を意味する．かつて状況づけられていたあり方の喪失を悼み，新たに状況づけられたあり方を受け入れそれに適応することが必要なのである．マックスは気苦労を制御できないと感じているが，気苦労それ自体ではなく彼の新世界というより大きな問題に向き合おうとする時，つまり「物事を慎重に特定し進めていく」努力をする時，に制御を取り戻していく．したがって，気苦労が源泉にあることでマックスの主体性が制約されていたのではない．むしろ，新しい世界と新しいあり方を受け入れ適応するのを拒否することで，マックスは自分自身の主体性を制約していたのである．

マックスの気苦労の経験をめぐるこの研究者の発見と直観が，いかにハイデガーの実存的枠組み――私たちが「被投的投企」として実存するということ――によって形どられていたか，読者も理解できるだろう．ロンバルドッツィ[66]の分析が強調しているのは，気苦労それ自体がマックスの主体性を「制約」し，彼が機能しない「原因」を作っていたのではないということである．このように説明するなら，臨床場面における気苦労についての，典型的な心理学的説明となっていただろう．そうではなくて，実存現象学的分析によれば，マックスは彼自身に抗って，気苦労の世界に自分を閉じ込めておくやり方を図らずも見つけてしまったということなのである．この気苦労の世界から初めて抜け出すことができたのは，マックスが「新しい世界」――新たな文脈，新たな状況と可能性，すなわち新たな「存在の仕方」――を「受け入れた」時だった．本分析において，強調されるのは因果的説明ではない．研究参加者によって生きられ，研究者によって理解されたところの，実存的に形どられた気苦労の意味なのである．

研究者の「先行所持」の成熟

データを読み込むさいに視点なしではいられないため，どのような概念を分析の指針とするかについて選択的であることが重要である．現象に対する私たちの直観は，ハイデガーが理解の「先行構造（fore-structure）」と呼ぶものによって，つねにすでにふるい分けられている[28]（pp. 191–192）．この構造を構成するのは次のものである．（a）あらかじめ持つこと，もしくは，私たち自身の生において研究課題が「かつて所持されていたこと」で馴染みがあるということ，（b）あらかじめ見ること，これはデータへの私たちの関心の向け方を指す，（c）あらかじめ摑むこと，すなわち，私たちが主題に出会う際に持ち込むより形式的な概念（それゆえ事前に批判的に吟味する必要がある）(注3)〔訳注：以上の先行構造については『存在と時間』の第三二節を参照〕．

理解にともなうこれらの「先行構造」を通して，ハイ

デガーは，他者の経験の意味を把握する際に何を議論の俎上にのせるかを現象学者が知り，それを明示することの重要性を強調した．ハイデガーにとってみれば，ひとは「与えられたもの」を理解するうえで，私たちが保持する経験的知識を構成する意味連関（彼はこれを「先行所持」と呼ぶ）を通じてごく自然にふるいにかけている．ここからハイデガーはさらに一歩を踏み出し，人間の経験を私たちが分析するうえで道標となる，より形式的で概念的な図式を発展させた．この目的のため，ハイデガーは自らの 1921 年のアリストテレス講義までさかのぼり，個人の「事実的生」の諸次元へといたる戸口として役立つだろう「実存カテゴリー」を明瞭に論じ始めるのである．それぞれの実存的「存在性格」は，人間経験の汎用性のある「地平」に関連している（世界性，共同存在，情態性，時間性など）．ハイデガーが「実存カテゴリー」を展開するまさにその理由は，見方を変えて実存カテゴリーをレンズとして用い，世界内存在という独特のしかたで個別の人を私たちが理解できるよう仕分けられるようにすることにある[注4]．実存カテゴリーは「レンズ」または「導きの光」となり，データの「意味を見抜くこと」を助けてくれる．言い換えると，私たちは実存的現象学の研究者として，ハイデガーにならって概念的枠組みに備わる確固たる役割を認め，それを通じて個別の人生を理解するという課題にアプローチするのだし，最終的には，質的研究者として，データを理解するという課題にアプローチするのである．この点は，現象学的研究を遂行するさいによく言われる「先入見すべてを括弧に入れよ」という命題とは重要な対照をなしている．

ここまで，『存在と時間』で提示されたハイデガーの豊かな概念的図式の表面をなぞってきたに過ぎないが，これらが暗に示しているのは人間存在の「気づかい構造（care-structure）」と呼ばれるものである．すなわち，私たちは自らに特有の「事実的生」に埋め込まれているのと同時に，自らの状況内での可能性と究極的には自らの自由を「計算する」のである〔訳注：「気づかい」をめぐる時間性については『存在と時間』の第六六節を参照〕．さまざまな講義録やこの代表作で示されているように，ハイデガーが「実存カテゴリー」として布置したものには，実際にはもっと多くのものがある．『存在と時間』だけでも 20 個に区別できる「等根源的」な実存カテゴリーをハイデガーは特定している．一方でヴァン・デン・ベルク[67]は，これらすべてをわずか四つの主題へと抽出する方法を見出している．すなわち，世界・身体・他者・時間に対する人の関係性である．現象学の伝統を学生たちに紹介しながら気づいたことだが，ヴァン・デン・ベルクのこの著作から始めると，実存現象学的研究（EPR）の存在論的基盤を伝える出発点として助けになるのと同時に，質的研究の企てにおける導きの光としてこれら「実存カテゴリー」の概念を応用できるということを，切実かつ説得的に示してくれる．

実存的超越性と「循環的」因果性

実存現象学的アプローチにおいて，人間心理の因果性について話題にすべきことがあるとすれば，それは「循環的」因果性（以下で示す）であって，作用因によって表される線形的な決定論ではない．例えば，ヨーロッパで列車に乗っている際に私たちが出会ったとすると，私たちが話題にするのは，どこから来たところなのかということより，どこへ行こうとしているのかということだろう．旅を旅にしているのは目的地であって，その逆ではないからである．「いずれにしても，「循環的な因果性」というものがあるのだ．循環的因果性によって，私がそうなりたいと願う自己を投企すると，それが現在の瞬間における私の選択の基礎を作り，今度はそれが私の「過去」を取り出して変容させるのである．……朝に鳴るアラームは，私がベッドから起きて一日を始める「理由」ではない．アラームに何か意味があるとすれば，それは私の「～になりたいという投企（project-to-be—in）」に対して持つ意味であり，この場合は，時間通りに出勤するような人になることにとっての意味である．それゆえ，アラームの音で目覚めることは，私が選択したところの自己になるという可能性を実現することなのである．私たちのあらゆる「主体的」な行為の構造はこのようなものであろう．さらに，私たちは自らの行為すべてに責任を負っているのであって，言いわけの余地はない．公園の芝生に足を踏み入れないのは，「立入禁止」と標識に書いてある「から」なのだろうか．それとも，朝に鳴るアラームと同様，私の自由な投企と実現すべき自己が付

与する重みを標識が帯びているからだろうか」[52]（pp. 13-14）．サルトル[17]は実存的な観点をこのようにまとめている．「いずれにしても，一つの選択が問題なのである……人間存在の特徴は，「人間存在は言いわけなしに存在する」ということである」（pp. 708-709）〔邦訳は第Ⅲ巻 315 頁〕．私は自らのなした行為を遡及的にとらえ，私自身に備わる一定の特徴（過去の投企・状況）を把握する．これらの特徴は，自らの行為に照らしてみると，自らの行為の「動機」として役立っていたことが理解できるのである．このような意味で，人がこれから向かう先こそ，その人がこれまでいたところの意味を決定するのである．サルトル[17]にとって，

> あらゆる行動は志向的であるはずである．事実，あらゆる行動は一つの目的をもっているはずであり，その目的が，今度は，一つの動機に関係する……いいかえれば，私の未来の時間化は，私の過去の方を指し示す．そして，現在は行為の出現である……．未来が現在と過去のうえに立ち戻って，それらを照らすのと同様に，動機に動機としての構造を付与するためにあと戻りするのは，私のもろもろの企ての総体である．（pp. 436-437）．〔邦訳は第Ⅲ巻 27-29 頁〕

したがって，フッサール[57]が述べているように，目的を求めることは手段を求めることを動機づける．あらゆる行為には確かに動機があるのだが，その動機は行為の「原因」ではなく，行為そのものの構造の一部なのである．シュッツ[46]は二種類の動機を区別することで，動機づけについての現象学的な理解を洗練させた．すなわち，「理由」動機と「目的」動機であり，それぞれが異なる種類の反省と相関する．今度は，現象学的直観へと向かうサルトルの方法論に目を向けてみよう．

2.3. 方法論的基盤――不純な反省（線形的決定論）vs 純化する反省（循環的因果性）

実存現象学的アプローチの循環的因果性に接近し，作用因果性の定式にはめ込まれた線形的決定論からこれを区別するために，サルトル[17][53]は，人間的な事象を概念化する二つの道を定めている．第一の（しかも最もありきたりな）ものは「不純な反省」を通る道であり，これは「心理学的決定論」（私たちの行為の意味を過去すなわち先行要因に割り当て，私たちの未来のありようを確率的な軌跡の結末へと縮減するような時間の概念）をもたらす．もうひとつは，「現象学的還元のおこなう純化する反省」[53]（p. 91）〔訳注：邦訳 166 頁では「浄化的反省」となっているが本稿では「純化する反省」に統一した〕と彼が呼ぶものを通って人間の行動を概念化することである．これは，人間の行為の基盤を私たちの「投企」[68]（pp. 91ff, 150ff）〔邦訳 103 頁以降〕に再設定するものである．投企とは，あらゆる瞬間の行為において私たちがそうなろうとしているところの「存在可能性」（“to be”）に他ならない．サルトルの言葉を借りれば，「われわれにとっては，人間は……まず，状況ののりこえによって，つまり，他人が彼をしてそうあらしめた所以のもので彼が何かをつくり出すことに成功するかによって特徴づけられる．……これこそ私たちが投企と名づけるものである」（p. 91）．

人間行動について因果的説明に甘んじることの自己欺瞞

サルトルが「不純な反省」あるいは「自己欺瞞（bad faith）」と呼んだものにおいて，私たちは，自らの過去の行為を原因（作用因）や動機として，既存の情況をとらえる傾向がある．こうした見方の何が「悪（bad）」で「不純」なのかというと，これが自由の否定であり，自由な存在としての私たちの「本性」を否定するに等しいからである．心理学分野の多くは，人間を自己欺瞞（self-deception）に向かわせるようなこの傾向に加担しており，その結果，私たちは自らの行為に責任を負うことよりも，その理由や原因を見つけることに腐心するようになっている〔訳注：サルトルの bad faith, mauvaise foi の邦訳は「自己欺瞞」で定着しているが，直訳すれば「悪しき信念」「不誠実」となるため，原著者は文字通りの自己欺瞞を意味する self-deception を追記している〕．

> 心理的決定論は，一つの理論的な考えかたであるよりも，まず一つの弁解的な態度である．あるいは，あらゆる弁解的な態度の根拠であると言ってもいい．

（……）心理的決定論は，私たちのうちに，事物の存在のしかたに比すべき存在のしかたをもった相対立する力が存在すると主張する．心理的決定論は，私たちをとりまいている空虚を埋め，過去から現在へ，現在から未来へのつながりを再建しようと試みる．[17]（p. 40）〔邦訳は第 I 巻 156-157 頁〕

心理的決定論によれば，過去が現在を生み出す．例えば，私がいま感じている怒りは，憎らしい人がその場に現れたことによって「引き起こされた」ものである．シュッツ[46]ならこれを「理由動機」の一種として言及するだろう．別の言い方をすれば，私を傷つけた相手を憎らしいと知覚するよう動機づけているのは，私自身には何の価値もないとする自己懸念から逃れようとする私の投企であるとも言える．他者が憎らしく見えることは，単に所与のものとして私が経験する不純な反省であって，実際のところは私の意識によってなされた選択の相関物である．他者が憎らしく見えるよう私を動機づけているのは，正確には，他者に傷つけられる場面から逃れたいという私の願望なのである．シュッツなら，私が傷つきから逃れようとしていることを目的動機として，すなわち他者が憎らしく見える経験を意味づける動機として記述するだろう．

解きほぐしてみよう．要するに，「未来において私を待ち受ける自己」こそが，私の現在の行為を動機づけるのであって，その逆ではないということである．「未来の自己」は現在の自己によって決定されるのではないし，ましてや現在の自己は過去の私の行為によって決定されてなどいない．心的な生に直線的な決定論は存在しない．では，なぜ私たちはそうした説明に屈してしまうのだろうか．サルトルによれば，私たちは「自己欺瞞」によってそうした説明に屈してしまう．というのも，弁解の言葉や外界を非難する言葉を借りて自らの責任から逃れるほうが，多くの場面でより容易だからである．それゆえ，上述した例のような情動の経験においては，私たちの情動が他者を明らかにしながら（例えば「憎らしい」というように）他者を共同構成するさいの，私たちの有責性がしばしば見過ごされている．注目すべきことに，サルトルにとって，私たちが自らの責任（すなわち自らの自由）から逃れようとしてもしなくても，私たちには主体性がある．したがって，実存現象学的研究（EPR）を展開するうえで焦点となるのは，研究参加者がそれを自覚しているかどうかにかかわらず，参加者があらゆる状況において自らの自由と志向性をどのように発揮しているか明らかにすることなのである（［69］を参照）．

純化する反省――研究参加者の自己欺瞞を「見抜く」

事例として，ディアス[70]のパフォーマンス不安の研究について検討しよう．ディアスは，大学バスケットボールの試合前と試合中にパフォーマンス不安の体験を語った一人の研究参加者の記述を分析した．その試合は本人にとって重要だったため，未来の自己の観点からして何が賭けられているかは一部で明らかだった――すなわち，バスケットコート上での熟達した選手であり，チームメイトを勝利に導いているという姿である．この分析において，ディアス[70]は，不純な反省と純化する反省を「先行所持」あるいは解釈的な概念枠組みとして活用し，それを通じて研究参加者の動機づけを解明している．まずは参加者の記述そのものについて考えよう．

どうして彼女（コーチ）は私に緊張しないでほしいのか，私だってプレーに支障が出るような生理的反応をどれほど避けたいか，こうしたことについて私は過剰に考え始めました．緊張から引き起こされかねないミスを避けようと思えば思うほど，心拍数が上がっていくのを生理的に感じました．もし彼女（コーチ）が事前にもっと伝えてくれていたら，時間をとって準備して試合に臨めたのにと思います．出場経験はこれまでにもありますが，いつもは試合展開を見る時間が最初にありました．というのも私はたいてい途中出場だったので，試合のスピードに合わせたり，選手の出方を見たりする準備の時間があったのです．

個性記述的な観点から，ディアス[70]は次のように分析する．

ゲームの開始時刻が迫ってくると，時間がないと参加者は感じる．事前に試合のことを教えてもらってい

れば，開始時刻までにパフォーマンス不安と向き合い，折り合いをつける時間があったのに，と嘆いている．そこで参加者は，こうすれば不安を防げたはずだというシナリオを作り出し，自身のパフォーマンス不安に対する弁解を試みようとする．不安をコーチングのせいにすることで弁解を生み出し続けるのである．もしコーチングがもっと違っていたら不安はなかったかもしれない．だから，社会的状況での不安が意味しているのは，高リスク状況にともなう不安と，そこから帰結する責任とを，彼女自身からそらすということである．彼女のパフォーマンス不安は，試合への備えが足りないと感じるほどに大きくなる．彼女がパフォーマンス不安を自らのものとして引き受けず，コーチをそのスケープゴートとして利用し続ける限り，不安をそらそうとする欲求も持続することになる．彼女は自らの不安を合理化している．試合の「最初」からプレーするように伝えること，これは通常コーチがしないことなのだが，コーチがそれをせず，試合の「スピード」に合わせる十分な時間を彼女は取れなかった，と自分に言い聞かせているのである．

実存現象学的アプローチを取ることでディアス[70]が示しているのは，参加者の未来の自己と「投企」（すなわち熟達した選手であること）が，参加者が非難と弁解の物語に陥ることで，いかにしてサルトルのいう「自己欺瞞（bad faith）」（または「自己欺瞞（self-deception）」）へと，あるいはシュッツのいう「理由動機」へと成り果てるか，ということである．参加者は，自らのパフォーマンス不安の共同構成に責任を持つのではなく，不安の爆発と選手としての力量不足について弁解している．彼女はコーチを非難してもいる（例えば，コーチが試合に出るための準備時間を十分に与えてくれていたら，これほどの不安は経験しなかったかもしれないと嘆いている）．これらはすべて，少なくともサルトル的な見方からすれば，弁解ないし「理由動機」という態度であり，参加者が自らの「投企」と，および自己の責任を含むその帰結と向き合うのを暗に避けていることを示しているのである．

サルトルは選択から逃げるのではなく，正面から向き合うよう促している．これは研究者としての私たちの仕事への取り組み方にも通じるだろう．「純化する反省」の態度とは，線形的決定論の観点で考えるのを除去する態度である．この決定論が不純な反省と相関しているとすれば，循環的因果性や志向性と自由の可能性は，サルトル自身の純化する（すなわち現象学的な）反省と相関するものである．現象学的「還元」（ラテン語 re-ducere すなわち「連れ戻す」に由来）を介して「本源的時間性」（あるいは循環的因果性）へと私たち自身を連れ戻すべく，不純な理論化という弁解や自己欺瞞は棄却される．現象学には，上述した「本源的」ないし「原初的」時間性への還帰が含まれる．これによって最終的に明らかになるのは，人間の行為を最も良く定義するのは「自由の係数」だということである．すなわち，状況が私たちに及ぼす影響ではなく，むしろ状況に直面して私たちがなす諸選択に目を向けるのである．このように，私たちが現在と過去を規定するのは未来へと向かう動きにおいてなのであって，その逆ではない．

別の事例として，スポール[71]の社交不安の研究を考えてみよう．この研究では，他の学生集団の前でスペイン語での発表を行おうとした時に生じた，圧倒されて身が固まるような不安の経験を参加者が記述している．スポール[71]もディアス[70]と同じく，サルトルによる純化する反省を用いて，参加者の「投企」あるいは志向性を明らかにしている．すなわち，スポールはデータ分析を行いながら，社交不安の状況の中の参加者にとって，賭けられていたものは何だったのか，と問いかけるのである．ディアスの研究参加者は最終的に「自己欺瞞」に陥り，「理由動機」を取って状況内での自らの責任を回避しようとしたが，スポールの研究参加者は弁解の言葉には移行しない．私たちは，実存現象学の研究者として，ハイデガーの被投的投企の概念およびサルトルの純化する反省の概念を，データに向かう際の解釈姿勢として用い，それにより，参加者の志向性（「投企」）――さらには潜在的志向性でさえ――として記述できるものをデータの中に見出そうとする．これはすべて，研究対象とする人間的現象（ここでは社交不安）の意味を明らかにするためである．スポール[71]は，先行する因果関係に言及して社交不安を説明しようとするのではなく，社交不

安を生みだしている志向性を明らかにすることによって，それを理解しようとするのである．

この参加者の社交不安は次の文脈で生じている．すなわち，スペイン語を発話することについて高い期待を抱いているものの，同級生の前で流暢に話す能力はないと自分を低く見積もっているという文脈においてである．発話することに先立って彼女はすでに同級生に比べて見劣りすると決めつけており，話したくても流暢に言葉にする能力がないという不釣り合いを認識して強調している……．この不釣り合い，社交不安状況における，参加者が目指す自己（優れた力を発揮することを期待する自己）と現在の自己（自らの能力を疑う自己）との不釣り合いが，時間的・身体的に表現されているのである．スペイン語を同級生の前で話せるかどうか予期不安が生じると，社交不安の状況は「永遠に続き」，時間が流れなくなる．この状況が続くと，彼女の不安は身体的に現れる．同級生の視線を前に，彼女の身体は自分のものではなくなる．「胸が締め付けられ」，「足がガクガクし」，ポインターを落としてしまう．パニックに陥った身体が不安に取って代わり，彼女自身も把握していない自己――震える声と震える体を持ち，他者の視線によって固まってしまった自己――を露わにし始める．社交不安状況のあいだずっと，参加者は他者の前に立つ自分に過度な焦点を当て続けている．凝視の対象になっており，他者の視線に射抜かれるように感じている．この過程で，彼女は自分自身が他者の前の対象であるとますます感じるようになる．この凝視する視線によって，彼女はその場に釘付けにされたように感じるのである．

このデータ分析では，参加者の「投企」あるいは未来の自分，つまりスポール[71]が言うところの参加者の「目指している自己（aimed-at-self）」が明らかにされている．実際，社交不安を生じさせているのはこの「目指している自己」すなわち「実力を発揮する自己」であって，「目指している自己」と現在の自己ないし「自己の能力を疑う」自己との食い違いを本人が知覚することで，社交不安が生じるのである．言い換えると，スポール[71]の分析で重要な発見となっているのは，参加者が自分自身をどのように実存的に位置づけているかである――すなわち彼女は，ある状況のなかに投げ入れられ，自らの能力を疑いながらも，自分に対して大きな期待を投げかけている人なのである．この実存的な位置づけが，社交不安の経験の一部を共同で構成している．分析はまた，参加者が他者の眼差しによってますます精査され対象化されるように感じることも示している．実際に参加者はこの眼差しによって「固まった」と感じている．したがって，参加者の「目指している自己」「現在の自己」，および他者との関係には，関心を寄せる世界に対して彼女がどのように志向的に構えているかがよく現れている．ここに実存現象学的研究（EPR）の真の強みがある．実存現象学的研究は，参加者の志向的な「投企」，世界や状況内での他者に対する志向的な構えに接近する能力を研究者に与えるが，まさにこの状況づけられた文脈がさまざまな現象を生じさせているのである．実存現象学的アプローチはまた，意味と理解を重視する．スポール[71]の分析でも，社交不安の先行要因や作用因に注目するのではなく，参加者にとって「永遠に続き」，「パニックに陥った身体が取って代わる」，社交不安状況の意味が強調されている．言葉を換えると，実存現象学的アプローチは，社交不安の意味に備わる時間性と身体化された変数を緻密に調べ，それにより，生きられた経験についての理解を深めるのである．

3．結論

20年前，アーネスト・キーン[25]は，行動を呼びかけながら心理学に挑戦を挑んでいる．

自然科学という乗り物は，心理学をアメリカ社会に統合するうえで重要だった――それは心理学に正当性を与え，機会を作り，支援を集めるよき原動力であった．……しかし，自然科学はまた拘束衣でもあった．心理学を詩・小説・芸術・音楽から遠ざけ，心のロゴス（logos of the psyche）にこれらの分野がもたらす洞察とアプローチをより困難でより周辺的なものにした．現象学は心理学に対してひとつの方法を提供する．その方法は，科学の向こうへ私たちの視野を拡大する

とともにアメリカ文化を新たに開拓し，そこで私たちは自然科学に代えて真の人間科学を行うことができるのである．

自然科学として構想された心理学に代わる洗練された代替案を発展させるには，単に説明や因果的思考を避ければいいというものものではない．私たちは，志向性を見出し，理解し，言葉にする能力も発展させねばならないのである．つまり，量的方法に代わる質的方法をあれこれ提案するだけでは不十分であって，特に新たな質的方法が，量的方法にともなう実証主義的傾向を免れていない場合にはなおさらである．人間についての真の科学を発展させるには，代替的な「科学論」，あるいはジオルジ[12]が端的にアプローチと呼ぶものに立脚する質的方法を発展させる必要がある．哲学に形どられた質的研究――特にそれが実存現象学の伝統に根ざしたものなら――人間行動の学徒に対して新たな地平を開き示す．これらの新たな地平を可能にするのは，人間科学として構想された心理学，すなわち，人間的な意味，動機，志向，価値に直接向かっていく心理学，の存在論的な基盤である．

長年にわたってこの方法を共に教えてきた私たちの経験から言えるのは，他の方法では見えない人間経験の諸次元を発見することに，学生たちが深い喜びを感じているようだということである．しかし本当の挑戦が求められるのは，このような発見を自分でできるようにする方法を教えるときである．これは教育学と科学が出会う場所であり，そこで私たちは，私たち自身および学生の関心を，方法論的文献を読むことから，実際に現象学的に心理学することへと向け直し始めるのである．

注

1. ドイツ語 Geisteswissenschaft（精神科学）に付与されている属格の Geistes-（精神の）の持つ両義的な「二重の意味」について熟考してみると興味深い．Geistes- は，慣例的なやり方で「客観的属格（objective genitive）」として，Geist を研究の「object（対象）」として読解することもできるし，非慣例的な（だが際立ってハイデガー的な）やり方で「主観的」ないし所有的属格として，すなわち，精神が所有し，精神が実行する科学（ここでは精神が主語であり，自らを理解する能力を所有しているとみなされる）．さらなる議論は，チャーチル[72]（pp. 70-73），およびハイデガー[73]（p. 102）を参照．同様に，Wissenschaft がアンビバレントに翻訳されていることに着目するのも興味深い．この言葉が自然と結合すると「自然科学」となるが，精神と結合すると「人間学（human studies）」に格下げされる．この語に「科学」を取り戻して人間科学としたのはジオルジ[12]だった．
2. 心理学者が超越論的領域まで「全行程」を行き尽くさないとしても（「完全な還元の不可能性」をめぐるメルロ = ポンティ[74]（p. xix）の議論を参照），私たちはフッサールの基本的手法から学ぶことができる．それは私たちにとって，自然主義的態度（つまり，説明的な心理学が心的な生を理解するうえでの答えをすべて保持しているとの信念）を括弧に入れ，自明なものから，人間の経験に含まれるより潜在的な意味へと私たち自身を連れ戻してくれるのである．R・D・レイン[75]は，こうした意味を「データ」ではなく「カプタ（capta）」と呼ぶよう示唆している．というのも，これらは単純な所与ではなく，「とらえどころのない出来事のマトリックス」から「取り出され」または「捕まえられ」なければならないからである（p. 62）．
3. ガダマー[76]（pp. 235-240）による「解釈学的経験の理論」の基礎づけは，まさにこれらのハイデガーの概念の中に見ることができる．
4. 実際にハイデガーは，実存分析家のメダルト・ボスの招きでスイスで 17 年間に渡って開催されたセミナーにおいて，『存在と時間』で最初に提示した実存カテゴリーにつねに立ち返り，精神科医・内科医・その他の医療従事者に，人を理解する実存的アプローチの訓練をする手助けを行なっている[77]．

引用文献

［1］Atkins, C.（2021, April 16）. Mass shootings in the U.S. in 2021. *MSNBC News*. https://www.nbcnews.com/%20news/us-news/mass-shootings-u-s-2021-n1264354

［2］American Psychological Association.（2021, March 11）. *One year later, a new wave of pandemic health concerns*. https://www.apa.org/news/press/releases/stress/2021/one-year-pandemic-stress

［3］Fisher, M.（2021, May 7）. 'Belonging is stronger than facts:' The age of misinformation. *The New York Times*. https://www.nytimes.com/2021/05/07/world/asia/misinformation-disinformation-fake-news.html

［4］Qiu, L.（2021, May7）. No, Covid-19 vaccines are not killing more people than the virus itself. *The New York Times*. www.nytimes.com/live/2020/2020-election-misinformation-distortions/no-covid-19-vaccines-are-not-killing-more-people-than-the-virus-itself

［5］Churchill, S. D.（1991）. Reasons, causes, and motives: Psychology's illusive explanations of behavior. *Theoretical & Philosophical Psychology, 11*, 24–34. http://dx.doi.org/10.1037/h0091 504

［6］Fisher-Smith, A., Sullivan, C., Macready, J., & Manzi, G.（2020）. Methodology matters: Researching the far right. In A. Winter, G. Macklin, & J. Busher（Eds.）, *Researching the far right: Theory, method, and practice*（pp. 197–211）. Routledge.

［7］Koch, S., & Leary, D. E.（Eds.）.（1985）. *A century of psychology as science*. McGraw-Hill.

［8］Wertz, F. J.（1999）. Multiple methods in psychology: Epistemological grounding and the possibility of unity. *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology, 19*（2）, 131–166.

［9］American Psychological Association Presidential Task Force on Evidence-Based Practice.（2006）. Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist, 61*, 271–285.

［10］Cook, T. D.（2018）. Twenty-six assumptions that have to be met if single random assignment experiments are to warrant "gold standard" status: A commentary on Deaton and Cartwright. *Social Science and Medicine, 210*, 37–40.

［11］Cook, T. D., Shadish, W. R., & Wong, V. C.（2008）. Three conditions under which experiments and observational studies produce comparable causal estimates: New findings from within-study comparisons. *Journal of Policy Analysis and Management, 27*（4）, 724–750.

[12] Giorgi, A. (1970). *Psychology as a human science: A phenomenologically based approach*. Harper & Row.（早坂泰次郎監訳『現象学的心理学の系譜――人間科学としての心理学』勁草書房，1981 年）
[13] Robinson, D. (1995). *An intellectual history of psychology* (3rd ed.). University of Wisconsin Press.
[14] Barlow, D. (2004). Psychological treatments. *American Psychologist, 59* (9), 869–878.
[15] Chambless, D. L., & Crits-Christoph, P. (2006). The treatment method. In J. C. Norcross & L. E. Beutler, & R. F. Levant (Eds.), *Evidence based practices in mental health* (pp. 191–200). American Psychological Association.
[16] Deaton, A., & Cartwright, N. (2018). Understanding and misunderstanding randomized controlled trials. *Social Science and Medicine, 210*, 2–21.
[17] Sartre, J. P. (1956). *Being and nothingness: An essay on phenomenological ontology* (H. Barnes, Trans.). Philosophical Library (Original work published 1943).（松浪信三郎訳『存在と無（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』筑摩書房，2007 年・2008 年）
[18] Brentano, F. (1995). *Psychology from an empirical standpoint*. Routledge (Original work published 1874).
[19] Husserl, E. (1989). *Ideas pertaining to a pure phenomenology and to a phenomenological philosophy, Second Book: Studies in the phenomenology of constitution* (R. Rojcewicz & A. Schuwer, Trans.). Kluwer (Original work written circa 1928 and published posthumously in 1952).（立松弘孝・別所良美・榊原哲也訳『イデーンⅡ（1・2）』みすず書房，2001 年・2009 年）
[20] Merleau-Ponty, M. (1963). *The structure of behavior* (A.L. Fisher, Trans.). Boston: Beacon Press, 1963.（Original work published 1942）（滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』みすず書房，1964 年）
[21] Dilthey, W. (1977a). Ideas concerning a descriptive and analytic psychology (1894) (R. M. Zaner, Trans.). In W. Dilthey (Ed.), *Descriptive psychology and historical understanding* (pp. 21–120). Martinus Nijhoff (Original work published 1924).（大野篤一郎・丸山高史編訳「記述的分析的心理学」『ディルタイ全集第 3 巻』所収，法政大学出版局，2003 年）
[22] Dilthey, W. (1977b). The understanding of other persons and their expressions of life (K. L. Heiges, Trans.). In W. Dilthey (Ed.), *Descriptive psychology and historical understanding* (pp. 121–14). Martinus Nijhoff (Original work published 1927).（長井和雄・竹田純郎・西谷敬編訳「他人と彼らの生の表出の理解」『ディルタイ全集第 4 巻』所収，法政大学出版局，2010 年）
[23] Heidegger, M. (2001a). *Phenomenological interpretations of Aristotle: Initiation into phenomenological research* (R. Rojcewicz, Trans.). Indiana University Press (Original lecture course presented 1921–22 and published 1985).（高田珠樹訳『アリストテレスの現象学的解釈』平凡社，2008 年）
[24] May, R. (1967). *Psychology and the human dilemma*. Norton.
[25] Keen, E. (2012) : Keeping the psyche in psychology. *The Humanistic Psychologist, 40* (3), 224–231 (Original APA address presented in San Francisco 2001) http://dx.doi.org/10.1080/08873267.2012.642218
[26] Fichte, J. G. (1982). *Foundations of the Science of Knowledge*. Cambridge University Press (Original work published 1794–1795).（木村素衛訳『全知識学の基礎（上・下）』岩波書店，1949 年）
[27] Howard, G. S., & Conway, C. G. (1987). The next steps toward a science of agency. *American Psychologist, 42*, 1034–1036. https://doi:10.1037/0003-066X.42.11.1034
[28] Heidegger, M. (1962). *Being and time* (J. MacQuarrie & E. Robinson, Trans.). Harper & Row (Original work published 1927).（熊野純彦訳『存在と時間（一・二・三・四）』岩波書店，2013 年）
[29] Wertheimer, M. (1923/1938). *Untersuchungen zur Lehre von der Gestalt II* [Investigations in Gestalt Theory II]. Psychologische Forschung, 4, 301–350. In W. D. Ellis (Ed.), *A sourcebook of gestalt psychology* (pp. 71–88). Routledge & Kagan Paul. https://psychclassics.yorku.ca/Wertheimer/Forms/forms.htm
[30] Wundt, W. M. (1916). *Elements of folk-psychology: Outlines of a psychological history of the development of mankind* (E. L. Schaub, Trans.). Allen (Original work published 1912).
[31] Münsterberg, H. (2004). *Psychology and life*. Kessinger Publishing (Original work published 1899).
[32] James, W. (2007). *The varieties of religious experience*. Wilder Publications (Original work published 1901).（桝田啓三郎訳『宗教的経験の諸相（上・下）』岩波書店，1969 年・1970 年）
[33] Fechner, G. T. (1861). *Ueber die Seelenfrage: Ein Gang durch die sichtbare Welt, um die unsichtbare zu Finden* [On the question of the soul: A walk through the visible world to find the invisible]. Amelang.
[34] Heidelberger, M. (2004). *Nature from within: Gustav Theodor Fechner and his psychophysical worldview* (C. Klohr, Trans.). University of Pittsburgh Press.
[35] Fechner, G. T. (1966). *Elements of psychophysics* (H. E. Adler, Trans., D. H. Howes & E. G. Boring, Eds.). Holt, Rinehart & Winston (Originally published 1860).
[36] Kugelmann, R. (2021, June). *The metaphor of the "threshold" of consciousness in Frederic Myers' theory of the subliminal self*. Paper presented at the annual meeting of Cheiron: The International Society for the History of the Behavioral and Social Sciences.
[37] Arnheim, R. (1985). The other Gustav Theodor Fechner. In S. Koch & D. E. Leary (Eds.), *A century of psychology as science* (pp. 856–865). McGraw-Hill.
[38] Köhler, W. (1971). Methods of psychological research with apes (M. Henle, Trans.). In M. Henle (Ed.), *The selected papers of Wolfgang Koehler* (pp. 197–223). Liveright (Original work published 1921).
[39] Watson, J. B. (1913). Psychology as the behaviorist views it. *Psychological Review, 20*, 158–177.
[40] Watson, J. B. (1924). *Behaviorism*. Norton.（安田一郎訳『行動主義の心理学』ちとせプレス，2017 年）
[41] Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. Macmillan Publishing Company.（河合伊六他訳『科学と人間行動』二瓶社，2003 年）
[42] Skinner, B. F. (1987). Whatever happened to psychology as the science of behavior? *American Psychologist, 42* (8), 780–786.
[43] Skinner, B. F. (1975). The steep and thorny way to a science of behavior. *American Psychologist, 30* (1), 42–49. https://doi.org/10.1037/0003-066X.30.1.42
[44] Slife, B. D., & Williams, R. N. (1995). *What's behind the research? Discovering hidden assumptions in the behavioral sciences*. Sage.
[45] Rychlak, J. F. (1981). *Introduction to personality and psychotherapy: A theory construction approach* (2nd ed.). Houghton Mifflin Company.
[46] Schütz, A. (1967). *The phenomenology of the social world* (G. Walsh & F. Lehnert, Trans.). Northwestern University Press (Original work published 1932).（佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成――理解社会学入門』木鐸社，2006 年）
[47] Radnitzky, G. (1970). *Contemporary schools of metascience (Second Edition)*. Humanities Press.
[48] Caspi, A., Hariri, A. R., Holmes, A., et al. (2010). Genetic sensitivity to the environment: The case of the serotonin transporter gene and its implications for studying complex diseases and traits. *American Journal of Psychiatry, 167*, 1–19.

[49] Bradley, R. G., Binder, E. G., Epstein, M. P., et al (2008). Influence of child abuse on adult depression: Moderation by the cordicotropin releasing hormone receptor gene. *Archives of General Psychiatry, 65*, 190–200.

[50] May, R., Angel, E., & Ellenberger, H. F. (Eds.). (1958). *Existence: A new dimension for psychiatry and psychology*. Simon & Schuster. (伊東博・浅野満・古屋健治訳『実存――心理学と精神医学の新しい視点』岩崎学術出版社)

[51] Churchill, S. D. (2000a). Phenomenological psychology. In A. E. Kazdin (Ed.), *Encyclopedia of psychology* (Vol. 6, pp. 162–168). Oxford University Press and American Psychological Association.

[52] Churchill, S. D. (2022). *Essentials of existential phenomenological research*. American Psychological Association.

[53] Sartre, J. P. (1948). *The emotions: Outline for a theory* (B. Frechtman, Trans.). Philosophical Library (Original work published 1939). (竹内芳郎訳「情動論粗描」『自我の超越・情動論粗描』所収，人文書院，2000 年)

[54] Churchill, S. D. (2018a). Explorations in teaching the phenomenological method: Challenging students to "grasp at meaning" in human science research. *Qualitative Psychology, 5* (2), 207–227.

[55] von Eckartsberg, R. (1971). On experiential methodology. In A. Giorgi, W. F. Fischer, & R. von Eckartsberg (Eds.), *Duquesne studies in phenomenological psychology* (Vol. 1, pp. 66–79). Duquesne University Press.

[56] Husserl, E. (1968). *Logische Untersuchungen: Zweiter Band: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis—I. Teil (5 Auflage)* [Logical investigations: Vol. 2. Investigations in phenomenology and the theory of knowledge—part 1 (5th ed.)]. Max Niemeyer Verlag (Original work published 1901). (立松弘孝・松井良和・赤松宏訳『論理学研究（2・3・4)』みすず書房，2015 年)

[57] Husserl, E. (1962). *Ideas: General introduction to pure phenomenology* (W. R. B. Gibson, Trans.). Collier Books (Original work published 1913). (渡辺二郎訳『イデーン Ⅰ（1・2)』みすず書房，1979 年・1984 年)

[58] Freud, S. (1963). Fragment of an analysis of a case of hysteria (1905) (J. Strachey, Trans.). In P. Rieff (Ed.), Dora: *An analysis of a case of hysteria* (pp. 1–112). Simon & Schuster (Original work published 1905). (金関猛訳『あるヒステリー分析の断片――ドーラの症例』筑摩書房，2006 年)

[59] Freud, S. (2010). *The interpretation of dreams* (J. Strachey, Trans.). Basic Books (Original work published November 1899). (高橋義孝訳『夢判断（上・下)』新潮社，1969 年)

[60] Bettelheim, B. (1982). *Freud and man's soul.* Norton. (藤瀬恭子訳『フロイトと人間の魂』法政大学出版局，1989 年)

[61] Merleau-Ponty, M. (1969). Preface to Hesnard's L'oeuvre de Freud (A. L. Fischer, Trans.). In A. L. Fischer (Ed.), *The essential writings of Merleau-Ponty* (pp. 81–87). Harcourt, Brace & World (Original work published 1960).

[62] Haynes, M. (2020). *Moments of connection and disconnection: A phenomenological investigation of the lived experience of aloneness* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[63] Angel, S. (2013) Grasping the experience of the other from an interview: Self-transposition in use. *International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-Being, 8* (9), 1–7. https://doi.org/10.3402/qhw. v8i0.20634

[64] Frankl, V. (1959). *Man's search for meaning*. Washington Square Press. (池田香代子訳『夜と霧』みすず書房，2002 年)

[65] Churchill, S. D. (2013). Heideggerian pathways through trauma and recovery: A "hermeneutics of facticity." *The Humanistic Psychologist, 41* (3), 219–230.

[66] Lombardozzi, E. (2021). *Paralyzing freedom: A phenomenological inquiry into agency and worry* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[67] van den Berg, J. H. (1972). *A different existence: Principles of phenomenological psychopathology*. Duquesne University Press. (早坂泰次郎・田中一彦訳『人間ひとりひとり――現象学的精神病理学入門』現代社，1976 年)

[68] Sartre, J. P. (1963). *Search for a method* (H. Barnes, Trans.). Vintage Books (Original work published 1960). (平井啓之訳『方法の問題（サルトル全集第 25 巻)』人文書院，1962 年)

[69] Churchill, S. D. (2000b). "Seeing-through" self-deception in narrative reports: Finding psychological truth in problematic data. *Journal of Phenomenological Psychology, 31* (1), 44–62.

[70] Diaz, V. (2021). *Performance anxiety: A phenomenological analysis* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[71] Spall, M. (2021). *A phenomenological inquiry into social anxiety* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[72] Churchill, S. D. (2018b). On the empathic mode of intuition: A phenomenological foundation for social psychiatry. In M. Englander (Ed.), *Phenomenology and the social context of psychiatry* (pp. 65–93). Bloomsbury.

[73] Heidegger, M. (1999). *Ontology: The hermeneutics of facticity* (J. van Buren, Trans.). Indiana University Press (Original lecture course presented 1923 and published 1988). (篠憲二訳『オントロジー（ハイデッガー全集第 63 巻)』創文社，1992 年)

[74] Merleau-Ponty, M. (1962). *Phenomenology of perception* (C. Smith, Trans.). Routledge & Kegan Paul (Original work published 1945).(中島盛夫訳『知覚の現象学』法政大学出版局，2015 年)

[75] Laing, R. D. (1967). *The politics of experience*. Ballantine. (笠原嘉・塚本嘉壽訳『経験の政治学』みすず書房，2003 年)

[76] Gadamer, H-G. (1975). *Truth and method* (G. Barden & J. Cumming, Ed. & Trans.). Crossroad. (Original work published 1960). (轡田收他訳『真理と方法（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)』法政大学出版局，2012 年・2015 年・2021 年)

[77] Heidegger, M. (2001b). *Zollikon seminars: Protocols—conversations—letters* (M. Boss, Ed., F. Mayr & R. Askay, Trans.). Northwestern University Press (Original work published 1987). (木村敏・村本詔司訳『ツォリコーン・ゼミナール』みすず書房，1997 年)